

伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第32号 2003年3月

発行 日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學文学部 伝承文学研究室内

TEL 03-5466-0224

ひとつ懐

萩中 美枝

数年前アイヌの女性グループに話をした。終わろうとすると、Aさんがためらい勝ちにウツソロ upsor の話を切り出した。祖母から聞いたのだという。

祖母は、女の大事な守り紐だと真顔で言った。そのときは煩わしく思ったのに此の頃になって気になる。回りの人に尋ねてみたが「誰も教えてくれないの」と、しっかり者のAさんが心細そうな顔になった。

女同志とはいえ、衆人の中で話題にできるとは、隔世の感があった。

upsorは懐のことだが、懐深く秘める下紐の意味にもなる。江戸時代から注目されてはいたがタブーが厳しく、貞操観念の対象にもなるので「いわゆる貞操帯」とも呼ばれ、いまだ全容を現さない。

瀬川清子『アイヌの婚姻』（1972年・未来社）にも1951年頃の下紐の事例が報告されているが「形の調査については全く無力であった」とし、聞かれることさえ「心中たのしまぬようである。84才の盲目の老嫗が私の質問に対して不承不承に答えてから「いやな話だ」と呟いた」とことや、話したこと「取りかえしがたく後悔している」様子が記されている。

そんなことを話していたら「家にあるけれど……見にくる？」というBさんの声が出た。姑から、あの世に行くときに持たせてほしいと言われて預かっているが「ただの一本の紐だよ」と笑う。

下紐の製法や形、締め方などは母方の系統をたどる。同じならシネウツソロ sineupsor（ひとつ懐）で、この人たちは、女として誕生した瞬間から深く関わり合う。嫁と姑は「ひとつ懐」になり得ないので、死装束に携わることはなかったが、かなり以前から同じ家に住む嫁を頼ることも見られるようになった。

目を改めて伺うと、Bさんの姑Cさんも気さくに応じてくれた。お二人共やはり一本の紐だというのが、腑におちない。片方の先端がこうなっていないかと尋ねても二人で「なっていない」と声を揃える。語っているような口調が快い。

促されて手に取り、絡まっている糸を乱さぬよう心掛けながら解いていくと「なつたあ」思わず叫んだ。「あれえ」と、またも一緒。そこでようやく気がついた。Aさんが驚くのは無理もないが、Cさんまでとは訝しい。聞けば、その下紐はCさんが製作したものではなかった。母親から「これがないと、あの世に行っても先祖に会えないから」といつて持たされたものだという。すると、これは120年以上前に作られたのか。銘銘の感懐が一時座を静かにした。

Cさんは次の年に百才の賀寿を祝い、二年後にオヤコタンoyakotan（別の国）に旅立った。

得難い経験をさせてもらったことに感謝している。

（北海道）

久保 華誉

2002年9月28日、第44回例会が國學院大學渋谷キャンパスに於いて開かれた。シンポジウムのテーマは、「口承文藝と地球環境」である。

まずはじめに、松谷みよ子氏の「地球環境と民話」では、イザナギ・イザナミの大地の生成神話から始まり、奄美や秋田、千葉などの民話を例に挙げながら、雄大な自然と対峙する人々の話が綿々と各地で語りつがれてきていることを、眼の前に情景が浮かぶかのよう

に解説していただいた。米屋陽一氏は「民話の中の里山・川・海と人びとの暮らし」で、人々の代々に渡る自然への観察、生活の知恵が昔話の語り

に生かされていることを、小島前世譚、自然歴や飢餓伝承などを通して読み解かれた。調査でも、話者の方々が昔話を初めは思い出せなくても歳時

の話を手がかりに、記憶の引き出しが急にガタンと開く様に話して下さることを思った。丸山顕徳氏の「幽霊マンションの話」では、ある断絶してしま

った金持ちの家の話が語る人々の妬みから事実無根の六部殺しなどのモチーフと結びつき、忌まわしい話として語られるまでを語り手である庶民の歴史感覚という環境を踏まえ、検証された興味深い調査報告であった。樋口淳氏は、昔話の構造から考える「地球環境と民話」で、プロップの構造論を踏まえ、本格昔話は主人公が「他界」である「自然の領域」へ赴き、成長して、「中心」である「文化の領域」に帰還する物語であり、文化は、自然に囲まれているもので自然に積極的に関わってゆくことで活性化してゆくと考察された。最後に、フロアを交えての質疑応答となった。個々のパネリストへの質疑応答も活発に行われたが、全体的な質問として野村典彦氏が、高木史人氏の「研究者としてのメディア」をひき、自分もまた対象に研究者として関わる時に、環境になってしまうのだというこ

とに対してどう自覚していったらいいのかという問いを投げかけられた。この問題は、答えが出る出ないは別として、敷居の中に既に入ってしまったという自覚を、研究者として永遠に真摯に問い続けなければならないのではないだろうか。

さて環境問題について、日本では、人と自然は同じものである、もしくは、神々が宿る自然の方が自分達よりも上の存在と見ているのではないだろうか。例えば、昨年、新潟県東蒲原郡で次のような話を聞いた。70年ほど前に2年続けて町で大火事があり、その原因は口寄せで白狐が「俺が山みんな裸にして俺住むとこねく(所なく)みんな町の衆たきぎ切ってしまうから、俺も町、黒焼きにしてくれっかと思った」と言ったそう

だ。そこで「町の衆はたまげて」木を切るのをやめ、白狐を祀ったとのこと。このような話、考え方は他にも多く見られるのではないだろうか。そういう意味では、本来日本人は「自然にやさしい」生き方をしてきたはずである。ところが、現在は世界の先進国中で環境問題対策は一番遅れていると言われている。自然に対して、上から見下ろすような「保護する」という発想が出来ないのは良いことでもあるが、大切に出来ないのでは少し甘えすぎのような気がする。環境という言葉は、英語ではcircumstanceという表現がある。これは、環境、周囲の状況などと訳されるが、元はラテン語から派生した、cir-cum (=round about) 周囲に、stance (=standing) 立つの意から成り、「周りを取りまくもの」というのが一般的な語源解釈である。しかしcumにはwithの意味もある。環境とはつまり、「周りと共に立つこと」なのかもしれない。一人だけでは駄目なのだ、周りのより大勢の人と、そして自然と共に手を取り合い、環境問題と向き合わねばならないということを再認識させられるシンポジウムであった。(埼玉県)

都会で私も考えた

——「口承文芸と地球環境」の問題を少々——

野村 典彦

2002年10月23日午後、千葉県在住のD氏の勤め先に同郷の友人からFAXが送られてきたそうだ。「衝撃写真 カッパ発見」という見出しの「東スポ」だったから、同僚の視線は冷ややかなものだったらしい。

彼の生家はかっぱ淵から遠くない。家は兄のA氏が継いでいるが、父B氏・母C氏ともお元気でである。シンポジウム「口承文芸と地球環境」の際に、私が想起していたのは、このA氏、B氏のことである。

A氏によれば、所有する土地の一部を手放すように市から求められているが、B氏はうなずかない。自分たちの大切な場所に、観光客がドライブを楽しむ道路が整備されることに納得がいかない。「8」のつく日に入れば天狗様にさらわれるかもしれない山だ。道路や橋の建設、川の改修、行政は環境破壊にばかりに熱心だ。市長が余所から来た人だからだろうか。近年オープンしたホテルにしても、作らないで欲しいと頼みに行ったのに、「団体を受け入れられるようにしろ」という東京の人の理屈で作られてしまった。

A氏もノスタルジックな故郷が好きだ。観光客もきつとトトロがいるような世界を期待しているはずだ。だが、数年前に駅にホテルができた頃から、そんな雰囲気は失われた。代替わりした名物のおじさんが「あまり信じていない人」なので、観光客に何を言うか気になっている。ある程度の開発はやむを得ないという気持ちも、実はA氏にはある。両親や家を出た兄弟姉妹は皆、環境破壊には反対だという。しかし、せっかく来てくれた観光客に何もなかったところだったと失望されるのも辛いではないか。当然のことながら、A氏自身の中に、さまざまな立場の考え方が同居している。

そもそも、佐々木喜善に話を教えたのはB氏の自家の年寄りなのだという。博物館で展覧会をする時にも喜善に話をした人たちについて取りあげて欲しいといったが受け入れてもらえなかった……。すると、この町の開発が、彼らの期待にそった方向で進められていれば、彼らが環境破壊を口にするのはなかったようにも思えてくる。ただし、その時には、きっと別の、α氏やβ氏が環境問題を考えていたのだろうけれど。

11月16日。ある勉強会の後に寄った飲食店のテレビが、カッパ騒動のタネ明かしをしていた。人騒がせなバラエティー番組は批判されるべきだが、自らを省みるため、この騒動を「公害を告げる河童」の話型だと言ってみよう。テレビ番組も、観光客も、研究者も、そこで生活する人にとっては公害になる。できれば、その可能性を否定したい。だが、「民話」を愛しているとか、研究しているとか、そんな言葉を根拠にできはしない。柳田の著作で知られる町の、柳田の用いなかった言葉＝「民話」による観光PRは、それぞれに対する評価と地域社会とが織りなすところの今日として、ノスタルジーを求める観光客という立場を含め、私たち一人一人が積極的に関わっている現実としてある。この関わり方の検証を怠ってしまえば、私たちが環境破壊を厳しく問われることを忘れてはなるまい。

棚田も染井吉野も人為によるものであり、文化をも含めての自然を考えなければならぬ。まして、語り手の顔を見て、そこに言葉を紡いできた「口承文芸」研究の「環境」観は、互いの生活の将来をより豊かにするためにこそ共有されるべきだ。「民話」関係雑誌の巻頭写真が、唇をかみしめた「もの言わぬ農民」の表情から、笑顔に変えられた意味は何だったのか。

孫が「嫁をもらう」には、築百数十年の茅葺きよりもシステムキッチンを備えた新築が望ましい。今でも囲炉裏が残っているなら、それは趣味といって良い。だから、バラエティー番組はアイドルタレントによる「DASH村」という伝統的な生活の偶像を見せてくれる（日本テレビ系列「THE 鉄腕 DASH」）のである。

既にポスターのコピーに利用した大学もあるようだが、「伝統的な暮らしは環境にやさしかった」という話型に寄りかかるのは簡単である。けれども、課題はその先にあるはずだ。「愛とか平和を詞にすれば、それで世界が変わると信じてた」と、竹内まりやが「あの頃」の思い出を歌って（作詞・松本隆「五線紙」）20年以上が経つ。如何に地球環境と向かい合うべきなのか。この難問が、メディアとしての自覚を如何様に抱くのかという問いに通じていることだけは確かだ。

とりあえず、私たちの団体は、大会を遠野で開く。地球環境を考えつつ、あの町の今、に私は参加する。馬車に揺られて行くつもりは、ない。（千葉県）

中田 功一

YAHOO JAPANで「遠野 河童」で検索してみたなら約1,690件のヒット。遠野・河童というキーワードは全国的に強い関心をもたれていることを改めて感じた。テレビを持たない生活をしている私が「電波少年河童事件」とやらを知ったのは、勤務先の宮古商業高校の生徒に東スポの河童の記事について質問されたからである。

宮古商業高校の通学圏には川井村や岩泉町があり、岩手県の東半分を占める北上高地から通ってくる。川井村は盛岡と宮古の中間、遠野は峠を越えた隣である。岩泉町も同様。行政区としては区別されても遠野・川井・岩泉は山伝いであり、野生生物からすれば単なるテリトリーの一部であろう。ここにはミナシロと呼ばれるアルピノのツキノワグマが昔から生息しており、つい数年前にも盛岡市郊外の梁川地内（川井村との境界）で出没している。それが北上高地である。

河童に話を戻そう。私も深く関わってきた川井村の山村生産用具が重要有形民俗文化財として昨年国指定された。この川井村にも「河童相伝の骨接ぎの薬」を始めとして河童の伝承は根強い。昔話や伝説として河童は生きてるところなのである。

1996年には岩泉町の高橋貞子氏が『河童を見た人々』を岩田書院から出版している。そこには昔話や伝説としての河童だけでなく、明治から平成までの実在の人の目撃談として数多く紹介されている。中には学校の先生の安家川での赤茶色の河童の目撃談すら記載されている。そういう意味では岩泉では未だに河童が生きているとも言えそうである。

さて、遠野の河童。「'92世界民話博 in 遠野」では学生時代から河童に固執していた常光徹氏がおばけ・妖怪展を担当した。盛岡中央公民館所蔵の「水虎」を始めとして板久安信氏の河童コレクション 120点等を展示した。遠野と河童は切り離せなかったのである。

河童湖の名物おじさんとして知られる阿部与市さんは2歳の時に河童を見たというし、今は「カッパ捕獲許可証」を得て、釣り糸にきゅうりをぶら下げて河童を捕まえようと毎日河童湖に通う運萬治男さんなど遠野では河童の話題には事欠かない。

そんなところに、「電波少年河童事件」である。地元の遠野出身のIBCアナウンサー菊池幸見氏は最初から「遠野の河童は赤い、だからウソ」とコメントしていた。『遠野物語』でも河童は赤いし、先述の岩泉町の数多い報告でも緑の河童はいない。北上高地では河童の体色は緑ではないのである。

笹間良彦著『図説日本未確認生物事典』（柏美術出版1994年）では、中国の水虎のイメージであり、水中の妖怪で、形態は江戸期に完成したとしている。おそらく一般的には河童のイメージは次のようなものだろう。すなわち、小児位の大きさ・背中に甲羅・粘膜に包まれた青黄色の身体・おかつぱ頭に皿・水かき・水中で魚を取って食い鉄気を嫌う・人や馬を水に引き入れ尻子玉（肝）を抜く・相撲の勝負を挑む・しばしば人間に捕らえられる。

宮古商業高校で職員と3年生に簡単なアンケート（回収・職員27生徒150）を試みた。結果、河童のイメージは「やはり」というべきか上記の如くであり、河童は実在する若しくは実在して欲しい、昔は実在したが今は水が汚れているからいない、とするのも含めると生徒の6割、職員の1/4が河童の存在を信じたいふうだった。壮大なロマンというべきか、北上高地の不可思議を証明しているというべきか。そんな土地と生徒のロマンを大事にしていきたい。

蛇足ながら盛岡地方では、あやまって川などに落ちること、水にはまることを「キャッパリ」或いは「ケアッパリ」という。語源については、「川入り」、「河童捕り」などの説があるが、北上高地西端の盛岡で生れ育った私としては河童説を採用したい。（岩手県）

遠野の憑祈祷

川島 秀一

「遠野物語拾遺」の九一話は、次のように始まっている。「附馬牛村の有部落の某といふ家では、先代に一人の六部が来て泊つて、其儘出て行く姿を見た者が無かつたなどいふ話がある。…」。

これが、いわゆる「六部殺し」の表現であったことは、佐々木喜善の『聴耳草紙』の131番「あさみずの里」を読み比べてみるとわかる。「あさみずの里」は二つの同様の話から構成されており、「第二の話は下閉伊郡刈屋にて、折口信夫氏とともに聴く」と佐々木の後注がある。

その「第二の話」とは、あるところの大屋の家に、正月2日の夕暮時、旅の六部が来て泊つたが、この家では六部を風呂桶に入れて蓋をして蒸し殺しにしてしまう。そして人に見られるのを恐れて、土間の白場のほとりに埋めて素知らぬふりをしていた。村の人たちは「その家へ夕方入った六部の姿は見たが、朝立つ姿を誰も見た者がなかった」という話で、最後は大屋に対する六部の祟りで終えている。

「あさみず(朝見ず)の里」という表題は、この表現から生まれたものであるが、ここでは、はっきりと六部を蒸し殺したことも述べられている。つまり、「遠野物語拾遺」九一話の「先代に一人の六部が来て泊つて、其儘出て行く姿を見た者が無かつた」という表現には「六部が殺された」ということが暗に示されていたわけであって、この表現は「六部殺し」の話の典型的な語りかたであった。

このような「六部殺し」の表現と話は、どのような現場から生まれてくるものであろうか。遠野地方では、イタコやハッケオキなどの宗教的職能者からだけではなく、「憑祈祷」と呼ばれる、日蓮宗の寺院や祖師堂で行なわれていた、災厄の祓除儀礼の中からも生まれることがあった。

たとえば、遠野市飯豊にある祖師堂の憑祈祷のときに、六部がヨリと呼ばれる女性に憑いて、「昔、おま

えの家に泊っていて、金を盗まれ、殺された。俺はネタ(敷板)の下に埋っている」などと語ったという。

祖師堂では、鬼子母神に向かってお上人様が経を上げ、ヨリと呼ばれる女性はその後ろに、数珠を持った手を合わせ、目隠しをさせられて座る。憑祈祷の依頼者の家族などは、ヨリを囲むようにして座り、団扇太鼓をたたきながらお題目を唱え続ける。団扇太鼓とお題目が堂内に響き続けるうちに、ヨリの体がゆらゆらと動き始め、そのときに初めて上人がヨリと向きあつて、ヨリに憑いたと思われる霊と問答を始める。「何のために障っているのか」などと上人が問い詰めていくと、依頼者の病気の原因をつくった霊がヨリの口を借りて語り始める。これが憑祈祷と呼ばれる祈祷であるが、病気の原因を知るとともに、その原因となった霊に思いを語らせ、なだめたり、あるいは恫喝しながら、病人から退散してもらうことをねらいとしている。

「長袖」と呼ばれる宗教的な職能者の霊は、すぐには退散しないとみられる。この「長袖」の類に「六部」の霊が含まれ、特に「殺された霊」として表現されて、「六部殺し」の話が生まれる場合が多かった。

憑祈祷は、そもそも修験の夫婦で行なっていた祓除儀礼であった。寛政7年(1795)の『宗門改覚帳』における遠野地方の羽黒派修験の一例では、鱒沢村で3院、綾織村で3院、小友村で1院の、計7院に修験11名と神子5名がいた。青笹村の5院には、修験5名と神子1名がいる。栃内村の4院では6名の修験、附馬牛村の1院には2名の修験が在住していた。遠野地方には羽黒派修験だけでも60名を越えている。修験が廃止された後に、憑祈祷に対する需要を一手に引き受けていたのは、主に日蓮宗の寺院や祖師堂における上人とヨリであった。遠野地方の「六部殺し」の話は、彼等の憑祈祷という儀礼の中からも生まれた話も多い。

今年6月の、第27回日本口承文藝學會は、この遠野市を会場に開催される。(宮城県)

根岸英之

2002年8月31日、市川市文化会館で、子どもから大人まで総勢400人にのぼる、実に多様なメンバーが参加した、市民手作りのミュージカルが上演された。

平将門や水戸黄門の言い伝えもある「八幡のやぶ知らず」に発想を得た「怪しの森」を舞台に、平将門、真間の手児奈、さらには市川の民俗行事「辻切り」や、巨木の根元に多く立つ庚申塔ゆかりの三猿なども登場する、市川の魅力満載のミュージカルだった。

市川に根ざしたミュージカルを作りたいというコンセプトにより、台本作りのためのワークショップから、市川在住の学会員米屋陽一氏、根岸が実行委員として参画、市川の民話や民俗についての情報を提供し、結果として、これらを多く取り入れた作品に仕上がった。

市川は、東京に隣接する郊外都市のため、代々、市川に暮らしている人より、移り住んできた人の方が圧倒的に多い。そんな文化風土の中で、地域の口承文芸や民俗を共有化していくには、意識的な働きが必要となる。今回、市川の民話や民俗を多く取り入れたことにより、参加したキャストやスタッフはもちろん、ミュージカルを見た人たちの中から、「市川にもこんなところがあったのか」との感想が上がり、新たな発見のきっかけになったようだった。

この市民ミュージカルを契機に、地域文化に関わる新たなネットワークができ、NPOの立ち上げの話も出ている。3月29日夜には、このメンバーが中心となって、市内の弘法寺という桜の名所のお寺を借り、「坂本長利の一人芝居 土佐源氏一宮本常一・聞き書きによる一」の上演も実現された。

“口承文芸”は、決して「滅び去る文化財」ではない。時代に合わせ、地域の中に生き続け、息づいていくものであろう。その動向に、研究者としてどのような眼差しを向けることができるか、21世紀の私たちには、今日的な課題探求のアンテナが、求められているといえよう。

(千葉県)

小野和子

昨年の秋、宮城県を代表する語り手永浦誠喜翁（登米郡南方町青島屋敷）が逝かれました。93歳でした。

人づてにはじめて翁にお会いし、その語りを聞いたのは34年前のことでした。耳で聞く翁の語りは文字で読んだものとはまったく違う味わいを持ち、雑談として聞く周辺の話もまことに興味深く、暮らしを背景にした民話の奥深さに触れたのは鮮烈な驚きでした。

翁の語りは1975年に『永浦誠喜翁の昔話』（稲田浩二監修・佐々木徳夫編。日本放送出版協会刊）として刊行され、はしがきに「本集には永浦翁の管理している275話のうち、175話を収録した」とありました。わたしは翁が記憶される民話の数の大きさに驚異し、同時に「割愛」された残りの民話をいつか翁から聞いてみたいと願うようになりました。その願いがかなったのは1985年のことでした。宮城県教育委員会が「宮城県民話伝承調査」を企画し、わたしが代表を務めるみやぎ民話の会がその調査の委託を受け、全県にわたって現存する語り手から民話を聞いて記録するという大事業に取り組みました。この機会を逃さず翁の語りすべてを記録することにして、その折りに229話の語りをテープに収め、資料集を作りました。

さらにそれから10年余後、翁が90歳を迎えられるという時、わたしは仲間四人とともに翁のもとへ再び採訪に通いはじめました。翁の語りをもう一度すべて聞き直し、しっかりと記録に残したい、それは今しかないと感じていました。至福ともいふべき翁との語らいの時間を過ごし、記録した語りを先の資料集と照らし合わせながら『青島屋敷老翁夜話』上・中・下巻（全876頁・みやぎ民話の会刊）をみやぎ民話の会叢書第十集としてまとめました。それを待つようにして翁は逝去されました。

翁を通して語り継がれた豊かな伝承の全貌—それは明日を生きる者たちに贈られる先祖の言葉であり、意志であり、慈悲であり、それは無数の先祖の命を明日につなぐことなのだと考えています。合掌（宮城県）

本年度の例会、来年度の大会の予定についてご案内いたします。

●第46回研究例会

日時：2003年12月13日(土) 13:30～17:00

会場：市川市生涯学習センター 3階研修室
(総武線・都営新宿線本八幡駅 徒歩15分)

テーマ：学校教育と口承文芸

発表者：櫻井 美紀氏 (語り手たちの会)
高木 史人氏 (名古屋経済大学)
米屋 陽一氏 (日出学園中学・高校)

コーディネーター：
根岸 英之氏 (市川市中央図書館)

●第47回研究例会

日時：2004年4月24日(土) 14:00～17:00

会場：國學院大学 渋谷校舎

内容：未定

コーディネーター：
酒井 正子氏

●第28回大会(2004年度)

日時：2004年6月5日(土)・6日(日)

会場：和洋女子大学
(千葉県市川市)

内容：未定

※一部変更があるかも知れません。後日、それぞれご案内を致します。

事務局より

※住所変更などがありましたら、事務局までご連絡下さい。

※口承文藝にご関心のある方をぜひご紹介下さい。

☆日本口承文藝学会への入会を希望される方は、入会申込書をご請求下さい。

入会金 1000 円、年会費 4000 円です。入会申込書の請求は事務局まで。

□2003～2004年度 運営理事（各委員会）は次のとおりです（○は、委員長）。

〔会長〕石井正己 〔事務局〕青木俊明・多比羅拓・鈴木健之 〔機関誌委員会〕○常光 徹・小池淳一・戸塚ひろみ・百田弥栄子 〔会報委員会〕○米屋陽一・大島建彦・川島秀一・小島美子 〔大会委員会〕○花部英雄・野村純一・鈴木佐内 〔例会委員会〕○荻原眞子・酒井正子・根岸英之・吉田敦彦 〔幹事〕小池ゆみ子・丸田雅子

□事務局が平成15年度より変更になります。

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 古典文学第4研究室（石井正己助教授研究室）

TEL / FAX 042 (329) 7246 〔水・金曜日、在室〕

「伝え」第3,2号の発送が大幅に遅れましたこと、深くお詫びいたします。

日本口承文藝学会 事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室（野村教授）内

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nonura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150-8440, Japan

☆「伝え」編集担当は、米屋陽一・大島建彦・白石昭臣・武田 正です。